

資料紹介

大西家藏番外謡本 (七)

明石上

ワキ調 「是ハ都方より出たる僧にて候、我未西国を見ず候程に、此秋思ひ立罷下り候 道行へ旅衣はるけき秋を行末ハ、くく、廻りめくれる小車の淀山崎を打過て、昆陽の池水生田川流るゝ月や須磨の浦明石にはやく着にけりくく、詞「急候程に、是ハ早明石の浦とかや申候、暫休らハはやと思ひ候 シテ女次第へ明石の浦の夕まくれくく、秋の心ハいかならん サシへ実や物冷敷秋の日の、折柄風も涼敷海面に、寄来る波の外よりハ、立まする人も渚のうつせ貝、其古しへにいつとてか、廻りあハぬを歎くかな 下哥へ只いつとなく我心移る月日もいつしかにさらてそ過る岸方ハ 上哥へ久堅の月も明石の浦の波、くく、風もなきたる朝霧に、嶋隠れ行船をしそ思ひそ出る人丸か、詠め置にし言の葉も実面白き、気色哉くく、ワキ調「いかに事成女性に尋申へき事の候 シテ調「此方の事にて候か何事にて候そワキ 「古しへ此明石の浦辺ハ、光源氏の大將仮に住給ひしとこそ承

西畑実

候程に、委く御物語候へ シテ「是ハ思ひもよらぬ事を御尋候物哉、源氏の大將其比ハ津の国須磨の浦にさすらひしに、折節霖雨の比此浦へ遷らせ給ひ、あの岡部の屋形にして、入道の娘と妹背の心浅からず、一年余り契り給ひしに、漸明る秋にもなれハ会者定離の習ひに終に都へ歸り給ひぬ、扱其女も妹背の名残をおしミ空敷岡部の家にて年月を送り、其後都に上り給ひぬと承及て候ワキ「か様に委語り給ふ、カ、ルへ御身ハいかなる人やらん ンテ調「童か、栖は程もなく、上へあの松陰の苔の下、我跡とひてたひ給へ 下同へ猶恨めしと夕花の、露と消にし有様を、明石の岡の女とも、しろし召れ候へや、今ハ疑ひ嵐吹松陰に隠れけり、此松陰に隠れけり ワキ上哥へ待佗る程しも長き終夜、くく、苔の庭ハ冷かに、露と消にしなき跡を吊ふ法そ誠成、くく、後シテ下へ明ぬ夜にやかて惑る心にハ、何れを夢と、分て語らん、上へか様に読しも我なから、心の闇ハ晴やらす、法の御声を便りにて、是迄顯れ出たるなり、あら有難の御事や荒有難や候 ワキカ、ルへふしきやな岡部の松の木陰より、其様けたかき上

藤の、赤き袴の重ねの絹のそはを取、影のことくに見え給ふハ、いかさま疑ふ所もなく、明石の上にてましますか、シテ詞「見給へ爰もおのつから、あれにし跡ハ岡野辺の、松吹風に声添て、ワキカ、ルへ又打寄る浦の波、シテへ唯聞ふれて、ワキへ冷しき、上哥同へ紅葉の秋も紅の、く、袖こそしほる恋衣、猶恨めしき言の葉の妄執を助け給へやく、ワキ詞「猶光源氏の御事御物語候へ、クリ上地へ仰光源氏の君と申奉りしハ、桐壺の帝の御子、内の交り隙もなく、色めき見ゆる花の春、月の秋とて、栄へ給ひしにサシへされとも有為転変の習ひ本来も、同へ世の中いとわつらしくはしたなき事のミ増りしかハ、シテ下へ唯身を引退き給はんとして、同へ須磨の浦半に心をよせ、終に移らせ給ひけるに、クセへ然るに此君、越方行末を想像、心も須磨の恨めしき、彼霖雨に御直衣の、袖こそいともしほたれてからき憂目と成にけり、其後雨のあししめり、星の光りも明らかかに、御舟に召れつゝ、空も明石に着給ふ、シテ上へ淡と見る淡路の嶋の哀さへ、同へ残る限なく見ゆる夜の、月と詠め給ひしも御情ふかくましますは、岡部の家にしハくも、契りし事を今ハはや、かれく成し言の葉の、独臥屋に伏沈む、あらなつかしの古しへや、下地へ独寝ハ、チヨノマイ、シテ上ワカへひとり寝ハ、君もしらぬや、つれくくと下同へ思ひ明石の、浦淋しさをシテ下へそれハふりにし言の葉の、下同へ是ハ恋しき昔も今も、月ハ明石の岡野辺の松吹風も、昔の琴の調なり、シテ下へ哀しらへの琴の糸、下同へく、長き闇路にまよひ来て、むかひハ淡路の嶋陰に、よせくる波の、立帰る妄執を、たすけ給へや跡とひたまへ、是迄なりと夕への空に、是まてな

りとゆふへのそらより、見へつる夢はさめにけり

笠 寺

次第へ山腹山の浦伝ひ、く、浮世の旅に出ふよ、ワキ詞「是ハ諸国一見の僧にて候、我生国ハ武蔵の国の者成しか、洛陽の寺社一見の爲、此程は都に住居仕候、又古里の方敷敷候間、唯今東に下候道行へ夢にねて現に出る仮枕、く、宿は数多に替れ共、同じ仮ねの美濃尾張、鳴海の宿に着にけりく、詞「急候間、鳴海の宿に着て候、此所に転輪山笠覆寺と申御寺の候、観音の靈瑞にて御座候由申候、折節卅三年の開帳と申候程に、立寄拝ミ申さうするにて候、シテ詞「なふくあれ成御僧、笠寺へ御参候ハ御道知へ申候へしワキ「いや是ハ龍福寺へ社参る者にて候へ、笠寺とハ何国の事にて候そ、シテ「されハこそ其笠覆寺を笠寺とハ申候へ、笠をめされたる観音の像にてましますハ、笠寺と杜申候へ、ワキ「扱ハ龍福寺を笠寺と申候そや、御存し候ハ教へて給り候へ、シテ「此方へ御入候へと、翁ハ僧の先に立、上同へいさ更ハ我もいさなへ法の道、く、迷ひの深き雲霧もはらしやせんと諸共に先に立てそ、参りけるく、シテ詞「是こそ観音にて候能く御祈念候へ、ワキ「荒有難や候、聞しに増る有難き御靈仏にて御座候そや、下へ南無や大慈大悲の觀世音、願ハくハ迷ひの衆生を導きて、涼しき道に引導し給へ、上同へ昔在靈山妙法花、く、今在西方名阿弥陀、娑婆示現し給ひて我等か為の觀世音、三世の利益同しくは、かく苦みの此身をも守らせ

給へ、法の声く、角て翁ハ上人の、く、御十念を授て、御前を立て出けるか立歸り我ハ此世にハ、なきそと云て其儘貴賤に紛れ、失にけりく、
 ワキ上哥 夜もすから転輪山の秋の月、く、影明かに空渡り、この御経を、誦誦するく、
 後シテ下 荒有難の御経やなく、上 我徒に日を送り、御法の声ハ聞すして、世を去し身の悲しさよ、冥途の苦みたびかさなり、せめて跡とふ人もなくて、明暮責を受し身なれ共、御僧の御法を受けて、成仏得脱の身とならん、荒有難や候
 ワキ上カ、ル 不思議やな声を聞ハ有つる人なり、そもや御身ハいか成人そ
 シテ詞 我古ハ此所に其名も高し高屋の何某、受榮といはれし者なり、徒に光陰に送り世をさりて、下 様にか様ミ隙なれ共、観音の仏縁に引れ、又ハお僧の御法を受けて、仏果に至らんこそ嬉しけれ
 ワキ 実去事を聞及しなり、更ハ昔を懺悔し給へ、御跡とひて参らすへし
 シテクリ 夫貧ハ諸道の妨と云り、
 同 富貴ハ又後世の障りと云り
 サシ 然れハ我古へは、同 花鳥風月を愛して、日夜の酒興にふけりしなり
 シテ下 せめてしハしの程なり共、
 同 御法の声ハ聞すして、遊樂の友を集め、樂ミ常に、つきざりけり
 クセ 時雨する先笠寺に参りてハ、仏の御名をも聞すして、花ハいつならんと、身の風に誘はれん、あた成事をしらざりし、月ハ又秋なれや、雪降木との山とハ、荒面白や白妙の富士の高根ハ余所ならず
 上 大慈大悲の春の花
 同 十惡の里に 芬く、三十三身の秋の月五濁の水に影清し、転輪山の鐘の聲、
 カウシ 諸行とひき無常をもしらて、朽果し此身の、冥途の旅といふ奈落、ならくの底に入ぬれハ刹利も首陀も、替らざりけりや、浅猿の

此身や荒淺増の此身や
 ロンギ上地 実や昔の物語、今ハ引かへ法を得て仏果に至り給へや
 シテ上 けに有難やかゝる身の、弥陀の本願なかりせば、浮ふ世更になかるへき
 上 同 実頼もしき御誓十惡といふとも引撰すへし
 シテ 只一声の称名に、罪をも滅して忽に
 同 彼国へ早く
 シテ 生るへき
 下同 頼もしくや、あら有難や猶も身を、吊ひたはせ御僧と、云声に残りつゝすかたも見えず、うせにけりく

小式部

ワキ詞 様候者ハ、上東門院にまします、和泉式部に仕へ申者にて候、今日は式部の内侍を伴ひ、北野へ御参詣有へきとの御事にて候間、我等御供申只今北野へ参詣仕候
 サシ 比しも今ハ春過て、けふハ卯月の衣かへ、色めき渡る人心都の気色ハ面白や
 道行 大内山を後に見て、
 水上 澄る堀川の橋打渡り行程に、しめの内野も影高き、北野の森も見え渡る右近の馬場に着にけりく、
 詞 御急候程に、是ハ早北野に御着にて御座候、御心閑に御宮廻りあらふするにて候、又是成絵ハ金岡とやらんの書れたる時鳥にて御座候立寄御覽候へ
 シテ 扱ハ是成か聞及にし給馬成かや、いかに式部、此杜鵑を御覽候へ扱も見事成絵にて候
 小式部 誠に聞及たるよりもうつくしき絵にて候
 シテ 実や絵にかけるおうなを見て心を悩ますも、紀の貫之か書たりしも誠なりけり、絵ハあた成物と云ながら、名人の業ハさも有なん誠の鳥も角やらんと、目かれもせずして詠め

居たり。いかに内侍かくもやあらん聞給へ、下へなくかとして聞に
 北野の時鳥、天満神の誓ひ成そや、内侍「荒面白の御歌や候去なから、御五文字に今すこしもや候覽シテ」「何とか有へきそ、内侍「今母上の御哥を難し申は恐れなれ共、道を嗜む身にしあれハ、心の程を申なりシテ」「実とおことの申ごとく、道を嗜む心指尤殊勝成心ばへなり、いさ思ひ寄を讀給へ、内侍「かくや候覽、下へなけきかふ聞に北野の郭公、天満神の誓ひ成そやシテ「実理や小式部よ、未いとけなくして、心指の誂しさよ、行末の思ひやられて頼もしや、上へ神も納受まします覽、いさ御神拝申へしサシ「抑此御神ハ、延喜の御門に仕給ひしか、同「外には仁義礼智信の五常を守り給ひ、内にハ又花鳥風月、詩哥管絃を專とし、ならぶ方なき、御事成しに下クセ「実や世中に、人のよきをそねみ、あしきを悦ぶハ、是人界の習ひ也、然に菅丞相、人の讒奏に寄つゝ、筑紫へ移されおハしまし、安樂寺にて、終に空敷成給ふ、然共神ハ正直の誠顯れ、不思議の奇瑞ましませハ其後、村上の天皇、天曆元年に、右近の馬場に移され、天満大自在天神と、神号をなし給へハ、神も悦ひおハしまし上「昨日ハ北関に悲しみを蒙る身なれ共、けふハ西都に、恥を雪ぬる尸たりと御神感あらたに、生ての恨死しての悦ひ普しや天満此御神そたつとき、ワキ詞「いかに申上候、御神樂を参らせられ候へシテ「更ハ御神樂を参らせうするにて候、シテ「ありがたや、マイ、上ワカ「我を頼む、人を空敷なすならハ、下同「天か下にて、名をや流さんシテ下「か様に御詠もあらたなれハ、同「誰かハ仰がさるへきと、名残の舞の袖、是迄なりと、内侍の君を、伴ひ給ひ、内侍の

君を友なひ給ひて、帰り給ふそ、ゆかしけれ

夢想松風

次第「生れぬ先の身をしれハ、く、心のとむる方もなしワキ詞「是ハ阿波の国三好の山家より出たる一様と申道人なり、我未都をミす候程に、唯今思ひ立都へ上り候、先是成麓の川をハ、吉野川とかや申候、御吉野の芳野とつゝけたる詞の縁こそ面白候へ、道行「咲花ハあらねと爰も吉野川、く、下す小舟の行末ハ西林かや鞍山、打音高き川波の流れて木津の里近き、鳴門の沖や淡路嶋、打越行ハ津の国や、須磨の浦にも着にけりく、サシ「船揺として以輕颺風は飄々として衣を吹、詞「我此所に上りてみれハ、風の音さへ由有けにて、浦山かゝる名所哉、殊に今宵は秋の半、稀成時節に候へハ、此儘暮して月を詠ハやと思ひ候、次第二人「上野に渡る薄霧のく、隙より見ゆる山路哉、サシ「面白や三五夜中の新月の色、二人「二千里の外の古人の心も、思ひやらるゝ計なり、下哥「波爰に立来る音や須磨の里、上哥「磯辺の千鳥声揃て、く、松の響も身にしめハ、いつく有共此浦の、秋一しほの、詠哉く、ワキ詞「いかに成女性に申へき事の候、御身の栖ハいつくの程にて候そツレ「是ハ此あたりの者にて候、何の爲に御尋候そ、ワキ「是ハ行暮たる修業者なり、御覽候へ俄に村雨の降来りて候、しはしの宿をかり申さうするにて候ツレ「暫御待候へ、主に其由申候へし、いかに申候、旅人の渡り候か、しはしの御宿と仰候、ワキ「いや叶ひ候ましツレ「主に申て

候へハ、お宿ハ叶ふましき由仰候 ワキ「荒笑止や、さらハ軒端の陰をかり雨をしのき申候へし ッレ「いやそれも叶ひ候まし ワキカ、ル」
 「荒情なの御事や、光源氏の言の葉にも、ハほのかにも軒端の萩をむすハすハ、
詞「露のかごとを何にかけましと有げに候、又何となく口号に、
下「かへる宿のうちならハこそおしからめ、そとハ何かはくろしかるへき シテ上「此言の葉を聞よりも、同「ハ、妻戸をきりりと押開き、こなたへ入せ給へやと、夕影のほのかなる、姿も見へず成にけりく ワキ「不思議やな唯今の主の人、行方しらす成けるは、いか様謂の有やらん、
上「よし ハそれハともかくも 上「ハ世を捨人の旅衣、く、露を枕に引敷てねられぬ床に夜もすから、月を囁く、はかりなりく 後 シテ下「更ぬらし曇りミはれミ昔思ふ、詠をしまの夜半の月影、
上「晴曇り見るか内にも定なき、二人ハ有為転変の世の中を、月もしめすと思へ共、昔の秋を忘れ兼て、涙もろ成、袂かな シテ「セイハ恥かしや、千種の陰のしの薄、
同「忍ふとすれと、ほに出て シテ下「昔を語、申へし ワキ「はかなの人の心やな、一念弥陀仏即滅無量罪共説れたハ、其執心を振棄て、とくくうかミ給ふへし シテ下「あら浅ましや、
詞「か程貴き人そとも、しらて過にし宵の間の ッレ「しハし程ふる村雨の シテ「足たゆけにも見へ給ひし、御心の中こそ恥かしけれ ワキ「貴き者と承る、身もやつれたる苦衣 ッレ「裾を結て肩に掛 ワキ「髪にハおどろを載て、さも浅ましき有様成を、かく宣ふこそ不審なれ シテ「詞「いや故人の言の葉に、人をゑらふと形を見すと、いひしと思ひしられたる、
上「心の水の濁らねハ月の光も移るなり ワキ

「心の水の濁らぬを知給ひたる御身は扱、いか成人にてましますそ シテ「詞「先夫よりも此浦に、年ふりまさる松風を、村雨と聞召れすや ワキ「実ミ思ひ出したり、扱ハ御身ハ古への、松風村雨二人の蜚の、其幽霊にてましますか クリ シテ「元来月に光なし、色もなく形もなく、
同「ハとりもあらぬ万里の空こそ、月の光なれ サレ「凡人間の迷ひ見聞に心をうつし、
同「貪欲愛執の一念隔生即忘とハ申せ共、十二因縁の流転ハ車輪の廻ることく也 シテ「受難き人身を受といへ共、
同「解脱の種を失ひて、ついの道をしらす クセ「只是地水火風の、仮初に継れて、来ぬる人の世の、あだ成事を観すれハ、
檀の朝日待まの花の露、江の辺につなかね舟の風情なる 上「此理をしられは、
同「万ミ萬歳と、願ふ計の心ハ藻に住虫の我からと、身より出せる罪なりと、語れハ今の夢人も、仏果を得たる気色こそ誠の道のしるへなれ シテ下「法の教へそ、有難き マイ
上「同「角て夜もはや更過て、く、うしみつ塩に、夜の波、うつやうつふもまほろしも、夢も破れて松吹風の、音はかりもや、残るらん

鴛乃草茎

ワキ「詞「是ハ諸国一見の僧にて候、我此程ハ都に候ひて雍陽の名所旧跡残なく一見仕て候、又是より津の国須磨の浦明石の浦をも一見せはやと思ひ候、是成所を人に尋て候へハ、もずめ路とかや申候又是によし有げ成古塚の候、いか成人のしるしやらん、誠に無常の中

に、いつれの日か又かくやらん、いと心細き浮身かな、下へあす
 しらぬ我身と思へと暮ぬ間の、けふハ人社、悲しかりけれと、下哥へ
 誑置事も哀成、昔の跡の母の下、何と忍ぶの草の露、消し浮世の分
 野を見るこそ哀成けれ、シテ次第へ千種の花にうつろひし、
 秋の心そ侘しき、サシへ折柄も哀催す夕間暮、恋塚寺の鐘の声、さ
 ひしさ増る秋の色、移ふ身こそ悲しけれ、下哥へ今とても昔恋敷我心
 上哥へ夢となくいつ、サシへ松かねの、サシへ風のどこにかりねして、
 枕の夢ハ幾夜共、身をしる雨にほしあぬ、袂露けき夕へ哉、
ワキ詞「我此所に來り無常を觀する所に、いとなまめきたる女性、
 忽然と來り給ふハいか成人にてまします、シテ「是ハ此あたりにて
 ハ見馴申さぬ御僧なり。いつくいか成人なれハ、此所にハ休らひ給
 ふそ、ワキ「さん候是は諸国一見の者成か、始めて爰に來りて候、此所
 をハ人に尋て候へハ、もすめ路とかや教へ候、又是成古塚ハいか成
 人のしるしやらん、上へ委語り給ふへし、シテ詞「是ハ昔此所にあ
 たし女の候ひしか、内のミ侍に橘の公頼とていとやさかた成人有し
 に、秋の花虫の音にめて候、此野を通り給ひしに、彼女に行あひ給
 ひ、かこと計の語らひに、女ハいとあこかれて、使の風を待わひ
 つ、遂に空しく成たるなり、ワキ「扱公頼ハ何となり給ひて候そ、
シテ「さん候宮仕への隙なかりしも、彼女の事のみ思ひつゝ、あの
 桂川に身をなけて遂に空しく成けるとなり、其時男一首の歌に、分
 上る麓の道ハ替るとも、越るハ同じ四万の山路と、下同へ誑置たり
 し言の葉の、哀さいとゝまさるらん、上同へ終に行道とハ兼て聞物
 を、サシへ常なき風の音をのみ余所とやなとか聞なさん、恐るへし

く、けふの日も早入逢の命の内に、くれぬらん、ワキ詞「猶と
 其時の事念比に御物語候へ、クリ上同へ実や浮世の物語、かたるに付
 て恥かしのもりて、余所にやしられまし、サシへ昔男野を分行ける
 に、同へいとつくしき女にあへり、深くかたらひて其家を尋し
 に、シテ下へ鴟の草茎にいたりしをさして、同へ我家ハ此草茎の筋
 に、当りたる里也と有しに、下クセへ其後おつと心にハかけなから、
 暇なうして尋す、次の年の春、有し所に来て見れハ草葉ハ露にそひ
 きつゝ、鴟の居たりし方もなし、為方なくて只独すぐゝと帰りぬ
シテ上へそれよりして哥人の、同へ見えぬと云枕言葉に、鴟の草茎と
 ハ誑しなり、されハそれより此野をハ、鴟野とかやいひしに草茎を
リヤツ略して、もすめと今ハ申なり、ロンギ上地へふりにし事を聞からに、
 今日の日も早入相の鐘こと故に果しとか、シテ「中となれや去な
 くら、さのミないハし岩代の松とハしらて妻妾の、地へ引わかれぬ
 其後ハ、シテ「苦ミ多きむねの内、何と晴さん明暮を、同へ待侘つゝ
 そついかく、シテ下へ空しく成し浮身の、邪嬌の罪の苦しさを、御
 僧の法のゑにしゆへ、うかミやすらん涙川、なかれて過し世語を、
 重て申さんと、云かと見えて、失にけり、ワキ上哥へ一夜ふす男
 鹿の角の塚の間も、く、鴟の草茎見へすとも、吊ふ法の声立て、
下へ南無幽霊成等正覺、後シテ下へ桂川、沈ミ果にし、うたかたの、
 哀はかなき、人の心や、上同へかれくゝの、鴟の草茎見えすとも、シテ
へ娑婆の春を願ハし、花の姿のあたしミハ、はかなき世をやしらす
 らん、去にても我は邪嬌の業深き、思ひのつもる心の内、乱るゝ髪
 を手にからまき、獄卒阿防羅刹の、標の数の隙もなく、うつやう

つやとうつの山、うつゝの人のシテ下へかことの妄執、同へくの
 恨の報ひ、我身にむくへハ、恨ハ却て惡鬼となつて、苦患の見せ
 しめ、呵責の声と、おそろしやシテ下へ荒恐ろしや、詞「おことハ
 たそ、何公頼のほうしんとや、猶それよりも恐ろしきは、飛魄飛さ
 り目の前に来るをミレハ、鉄の鵬の、下へはし足劔のことく成
 か、同へ童か髪に乘移り、かうべをつゝきずいをする、こハそも
 童かなしける科かや、荒浅ましや恨めしやシテ下へされ共御僧の御
 法にひかれ、同へく、鬼もさり火煙も消て、くらやミと成かと思へハ月出で、すハや西にと行雲のく、影きへくとぞなりたり
 ける